

## 北九州市寸描

式 正 英

1965年の春から三年の間に、熊本・鹿児島への巡検、日向・延岡の調査、大分の学会巡検、八代・北九州市の調査、奄美諸島の巡検、鹿児島への調査という具合に、半年に一度の割合で九州旅行をしたことになる。亡父が福岡出身の所為か九州の地は踏むごとに大それた親しみを覚える。血は争えないということなのであろう。

昨夏、北九州を訪ねたときは、九州一体は異常の早魃に見舞われていただけに、晴天の日和にめぐまれた。宿舎の小倉望玄荘からは、関門海峡から響灘にかけての海面が大観できる。昼は紺碧の海と殷賑な工業地帯、夜景は祭めく光の珠数で殊に他美しい。この宿は、海沿いの平地に面する企救山地西縁の断層崖下のケルンパット上にあり、海拔130m、いわば常時東京タワーの展望台（海拔148m）から眺めているようなものである。

調査をすすめてゆくうちに驚いたのは、北九州市域の土地の人工改変の度合の物凄さである。本州の百万都市周辺の丘陵地の開発などは現在進行中であるが、この海に近い丘陵地が削られ市街地化したのはかなり以前である。関門海峡側の海岸線は明治以来の埋立地が連続し、現在は若松半島の北岸を西へと埋立が続けられている。洞海湾の人為的な変化は、湾奥部の近世干拓地に始まり、明治34年八幡製鉄創立の前後から埋立が活潑となり、現在は狭い航路用の水面が残されるのみで両岸に埋立地が並ぶ。洞海湾の古名「大川」の名がより応わしくなった感じである。埋立材料が製鉄所の鉾津や炭田の採炭廃土であることにこの地の特色が示される。洞海湾中にあった葛島など二、三の小島は埋立地にとりかこまれて丘となり、若戸大橋付近の中島は航路の障害として削りとられ1940年姿を消した。

豊後水道に面する企救山地東側の「裏門司」にも人工改変の波が押し寄せている。その沈水型山麓線の湾入部には、18世紀末葉に築造された伊川、曾根干拓地があり、それらの間や地先は現在どしどし埋立地が造成されつつある。岬角部ではバラストや石灰岩の採石が盛んで、人工的に削平されて平坦地となり岬の斜面は次第に後退する結果となっている。そうした岬の一つ、橋ノ鼻には梅花石（天然記念物）が露出する。梅花石は古生層の輝緑凝灰岩で、晶出した石英脈が五弁の梅花の形を散りばめたようにある所から名付けられた。土曜の午後などには、銘石ブームを反映して人が群がっている。

北端の部<sup>へ</sup>崎には面白い通信施設があった。豊後水道を行きかう船を監視し、この通信所と契約している関門港の荷役業者に入港に先立ってその動静を通報し、予め受入れの準備を整えさせるという

業務を持っている。いわば“敵艦見ゆ”の産業版というわけである。北九州というところは動きまわって唸りを生じ、手段をつくして地下資源を掘り、土地を造り、骨身を削りながらも立ち上がるようにするよな意欲に満ちた活力を感じさせる所である。(1968年6月29日)

## 国旗の文化地理

正井泰夫

地理には、アカデミックな分野と、応用・教育の分野と、趣味の分野がある。今ここに書くのは、第3の趣味の分野の地理である。

世界の国旗をずらりと並べてみると、赤・青・空色・白・紫・緑・黄・黒・褐色・だいだいなど、実にさまざまな色彩がある。では、赤系統の色彩はどのような国が使っているだろうか。地理学者なら誰でもやる方法、つまり分布図を作ってみよう。すると、2つの大きな傾向があることが分る。1つは、社会主義圏に多いことである。しかし、よく見るとソ連とアジアの社会主義国に多く、東ヨーロッパでは、西ヨーロッパと同様に多彩な色を使っている。もう1つは、温帯から寒帯にかけて多いことで、これは世界的な一般傾向である。

熱帯諸国の実情はどうであろうか。アフリカでもアジアでもラテンアメリカでも、緑・青・黄系統が圧倒的に卓越する。これは、熱帯圏の住民が、暑熱を連想させる赤系統よりも、清冷な感じの色彩を好むことによるのであろう。しかし、東南アジアには比較的赤系統が多く使われている。

国旗には、太陽・月・星がマークとしてよく現れる。これらのうち、圧倒的に多く見られるのは星で熱帯から温帯にかけて広く分布するが、特に熱帯に多い。彼らは日没によって生気をとりもどし、星にちなんだ物語りを発展させてきている。月となると、星と同じく夜の天体でありながら、専ら旧大陸、それも回教の分布と密接に関連した分布を示す。北アフリカから東アジアに分布が局限されているのである。太陽はどうであろうか。不思議なことに日本から東南アジアにかけての地域に多く、ほかは実に少ない。太平洋の西縁は、太陽信仰の本拠なのであろうか。色彩にも赤系統が多いのも、何かこれと関係しているのかも知れない。

国旗のデザインに十字架が使われることもいくつかあるが、そのほとんどはヨーロッパに限定されており、特に北ヨーロッパに多い。新大陸はいうに及ばず、中・南・東欧でもほとんど使われていない。

それに対して、3色を基調した国旗(例えばフランスの三色旗)は、北欧を除くヨーロッパから、アフリカ・西南アジア・ラテンアメリカへかけて広く見られる。しかし、東アジア・オセアニア・アングロアメリカでは、ほとんどかえり見られない。